

保育者養成校における学生の言語発達理解の 現状を通して考えるカリキュラムマネジメント —「保育内容言葉」と「保育の心理学」の連携の検討—

中 野 真 樹
松 尾 由 美

1. はじめに

短期大学での保育者養成の最も大きな課題の一つは、2年間という限られた短い期間の間に、保育者として必要な知識を習得し、その知識を保育実践に活用していく力を身に着けることが求められることであろう。横沢ら(2016)が指摘するように、各科目での学びを確実に定着させ、様々な科目での学びを連携させながら積み上げていくためには、カリキュラムマネジメントが必要不可欠である。

1. 1 本学の現状と課題

本学の学生の特徴として、各科目での学びが定着しておらず、学習内容を学習者が主体的に関連させていく力が不足していることが指摘されている(松尾 2016)。したがって、学習者自身が、各科目での学びを自発的に関連させることを期待するのではなく、教師側があらかじめ、体系的なカリキュラムマネジメントを行い、各科目の関連性を明示した上で、各科目で学ぶべき事柄と、教科横断的に学ぶ事柄を整理して、教授することが求められる。

また、実習指導の中で、日誌を記述する際、発達的な視点を持って子どもを観察することができないという課題が見られる。実習生の実習日誌の分析を行った権藤(2007)においても、子どもに関する記述は多いものの、その多くが表面的な子どもの行動や様子の記載であり、実習生にとって発達や子どもの内面などを細かく観察・記録することが難しいことが指摘されている。子どもの発達は、各保育内容の領域、保育の心理学、保育内容総論など、複数の科目において、繰り返し学習しているはずであるが、知識の定着、活用が難しいことが推察される。したがって、子ども理解に不可欠な子どもの発達の理解を深めるためには、カリキュラムマネジメントを実施し、科目横断的な授業計画を立案することが有効であると考えられる。しかし、現状としては、各科目の担当者がそれぞれ授業計画を立案しており、各科目で学ぶべき事柄の明確化や、科目間の連携がなされていない状況である。

1. 2 保育者養成校におけるカリキュラムマネジメントに関する先行研究のまとめ

養成校におけるカリキュラムマネジメントに関する先行研究としては、保育者養成カリキュラムにおいて、科目同士の連携を図るためのシラバス調整に関する研究である、野尻ら(2014)がある。これによると、主要科目の担当教員の協議により、講義内容の時期調整や他科目との連携を行うことで、より質が高く学生の学習状況やニーズに合わせたカリキュラムが作成できる可能性を示唆している。

カリキュラムマネジメントに関する各養成校の具体的なとりくみを紹介するものとしては田中ら(2013)がある。養成校の実習指導に関するカリキュラムマネジメントに関する報告としては村田(2016)がある。また、教科科目横断に関する研究として、担当領域の異なる複数人の教員で1科目を教えるティームティーチング方式の実践を紹介し、科目間での学びの積み重ねによる5領域への理解の深化を目的とするカリキュラムマネジメントとその効果について研究する横沢ら(2016)がある。同様に、昆虫を題材とした5領域を横断した学習のとりくみの紹介として、渡部ら(2016)がある。このほかに、保育科目の横断的かつ総合的な学びの必要性について、「保育内容総論」科目を中心にその現状と課題について言及した徳本(2015)がある。本報告もまた、この保育科目の横断的な学習について述べるものである。

2. 本報告の目的

これまで、いくつかの科目での科目を越えた連携に関する報告がなされているが、子どもの発達に関する科目横断的な教育プログラムや実践に関する報告は行われていないようである。そこで、本報告では、来年度以降、保育者養成校における学生の子どもの発達の理解を深めるための科目横断的な取り組みを実践するにあたり、カリキュラムマネジメントに活用するための基礎資料を得ることを目的とした。具体的には、本学学生の子どもの言語発達に対する理解について調査を行い、本学の「保育内容・言葉」と、「保育の心理学」の間の科目横断的な取り組みの可能性について議論する。

「保育内容・言葉」は5領域の科目の1つとして、幼稚園教育要領・保育所保育指針にもとづく保育観を学び、その保育現場での実践や他の領域との連携について学習した後、言語学分野の知見をもとにしたこどもの言語獲得・言語発達について学んでいくこととなる。具体的には幼児、児童の音声・語彙・文法の獲得、発達と文字の活用について定型・非定型発達のそれぞれの事例を学習したのち、保育者としてこどもの言葉の学びにどのようにかかわり、支援していくかを検討する。その

後、絵本等の児童文化財について学び、その活用方法を習得していく。

保育の心理学は、1年生後期に行われる講義形式の「保育の心理学Ⅰ」と2年生前期に行われる演習形式の「保育の心理学Ⅱ」から構成される。保育の心理学Ⅰでは、こどもの発達にかかわる心理学の基礎を取得したうえで、こどもが人との相互的なかかわりを通じて発達していくことや、発達初期の経験の重要性について学ぶ。保育の心理学Ⅱでは、保育の心理学Ⅰで学んだ乳幼児の発達に基づき、発達援助の基本的な考え方を学び、保育における発達援助を修得することを目標にしている。

この2科目は、言語学と心理学というそれぞれの見地から、こどものことばの発達について教授している。その教授内容にも共通点が見られる。1年次後期に開講される「保育の心理学Ⅰ」、2年次前期科目である「保育の心理学Ⅱ」、2年次後期科目である「保育内容・言葉」の3科目を通して、1年半の間、継続して共通した学習内容があるということになる。そこで、それらの繰り返し学習の効果や、学習内容の定着度合いについて調査を行い、現状のカリキュラムマネジメントに関する課題を把握したい。

3. 方法

(1) 対象者と調査の手続き

2017年1月に、保育者養成短期大学で、「保育の心理学Ⅰ」を受講している1年生101名と、「保育内容・言葉」の授業を受講している2年生117名を対象に調査を行った。調査時点で、1年生は保育の心理学Ⅰ、保育内容総論等複数の科目で子どもの発達を学ぶ講義を受講しており、乳幼児の発達の基礎的な知識を習得していることが期待されている。一方、2年生は、保育の心理学Ⅱ、保育内容・言葉等の講義を受講し、発達に関する知識の理解に加え、発達の見通しを持って次の発達を促す指導計画を立案することや、各領域における発達と他の領域の発達との関連性を理解すること(例えば、運動発達が認知発達や言語発達につながること)が望まれる。

(2) 調査項目

乳幼児の言葉の発達に関する知識を確認するために、言葉の発達に関するターム(喃語、二語文等)を問う項目、各発達の特徴が現れる順番を並び替える問い、言語発達と関連する他の発達に関する問いを尋ねた。調査項目の詳細を付録1に添付した。

(3) 手続き

両学年とも、各科目(1年生は保育の心理学Ⅰ、2年生は保育内容・言葉)の学期末試験の前の15分間を使って、調査を行った。対象者には、授業改善のための研究に調査結果を用いること、データを用いる場合は個人の得点が明らかにならないよう全体的な分析を行うこと、また、各個人の調査データを本試験の加点とすることを、口頭と調査用紙上で説明した。

4. 結果

(1) 得点化

用語を答える問題(大問1と大問3)では、正しい漢字もしくは仮名で回答していた場合、正答とし、学年別に正答者の割合を算出した。このとき、同じ現象にたいして2教科間で異なるタームを用いて説明をしていたものに関しては、そのどちらかを記述しても正答とした。具体的には、「語彙爆発・語彙の爆発的増加期」「過拡張・拡張的用法」の2例である。また、発達が発現する順番を並び替える問題(大問2)では、全て正しく並び替えられていた場合を正答とし、それぞれ正答者の割合を算出した。学年別の、各問の正答率を図1-1～図3-4に示す。

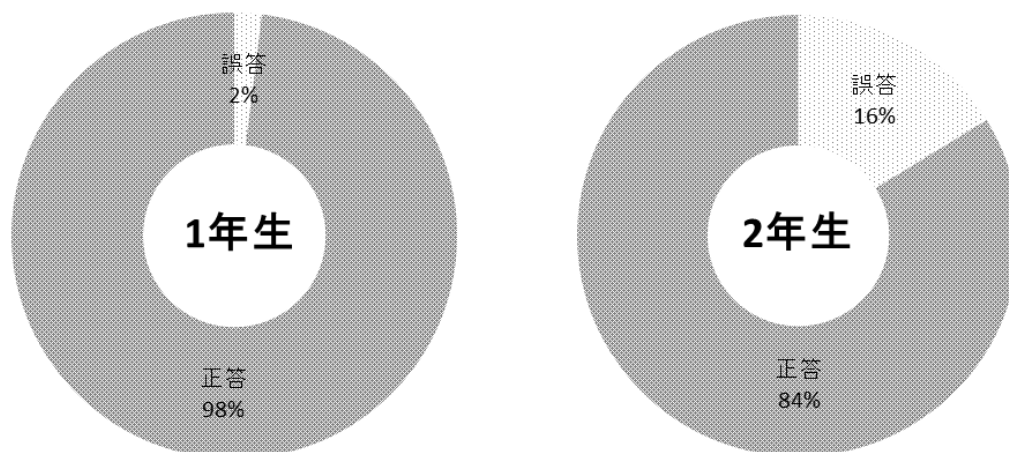


図 1-1 学年別「二語文」の正答率

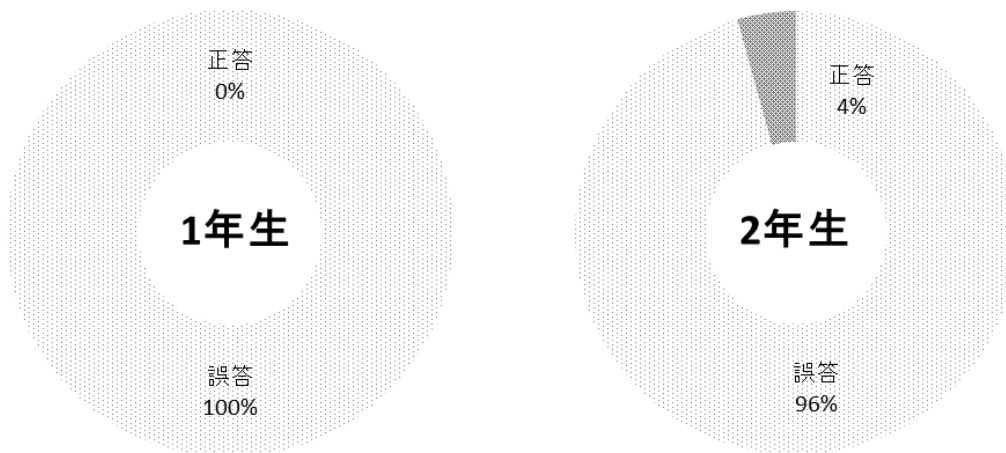


図 1-2 学年別「早期出現語彙」の正答率

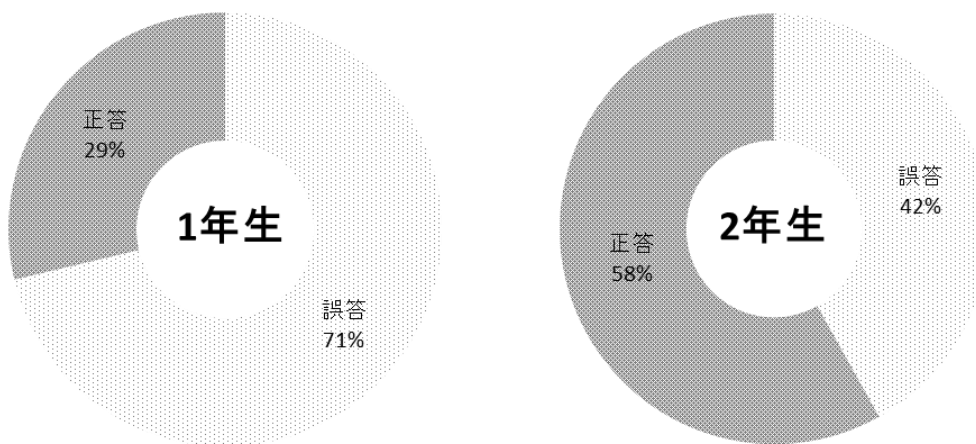


図 1-3 学年別「初語」の正答率

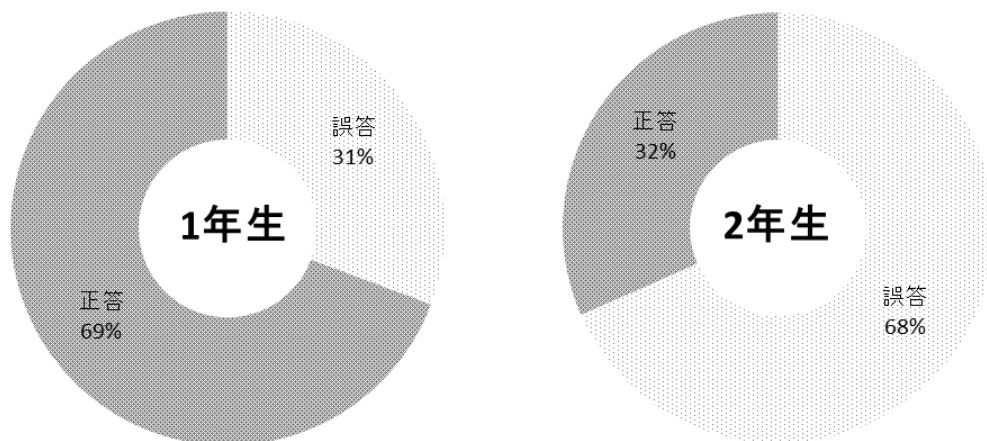


図 1-4 学年別「囁語」の正答率



図 1-5 学年別「語彙爆発・語彙の爆発的増加期」の正答率

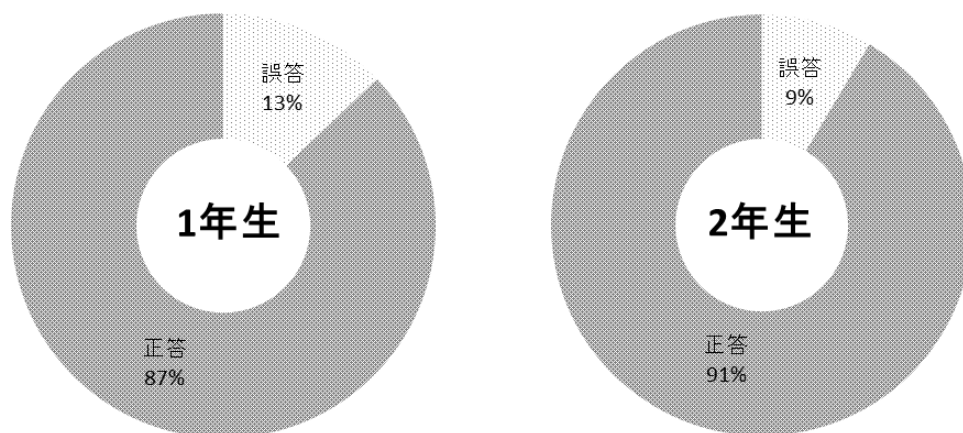


図 1-6 学年別「クーイング」の正答率

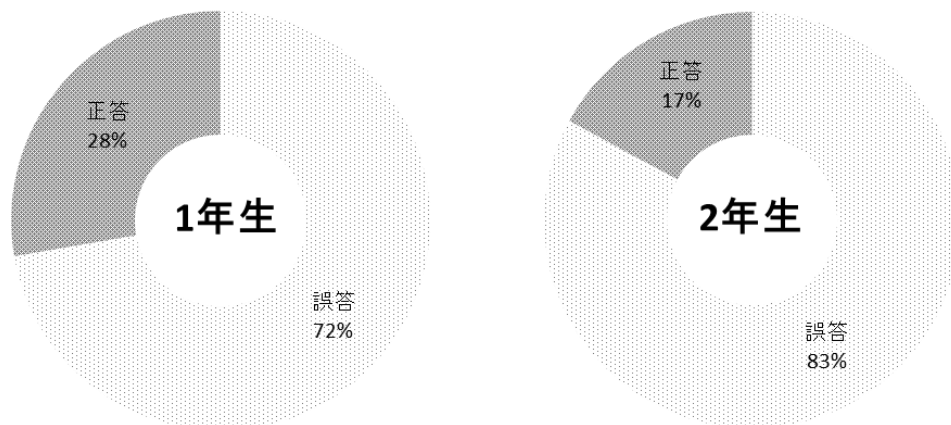


図 2 言葉の発達の発現順の並び替えの正答率

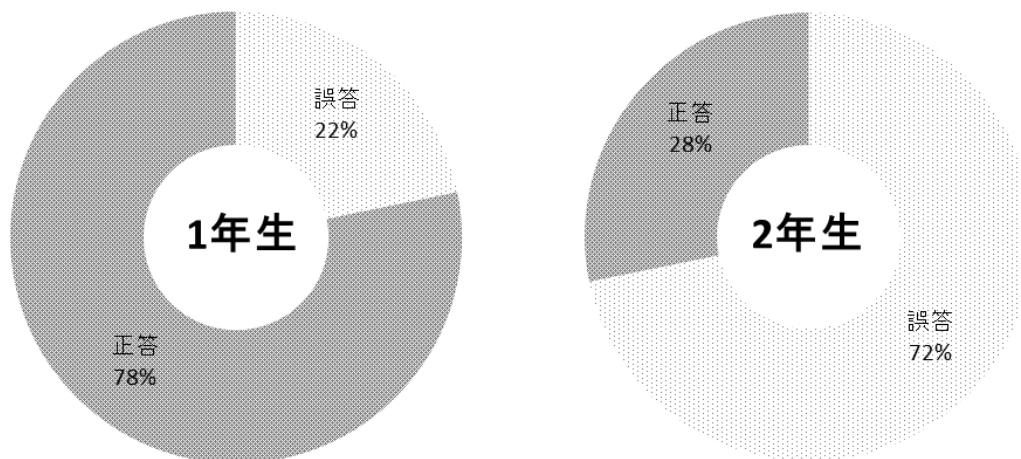


図 3-1 学年別「三項関係」の正答率

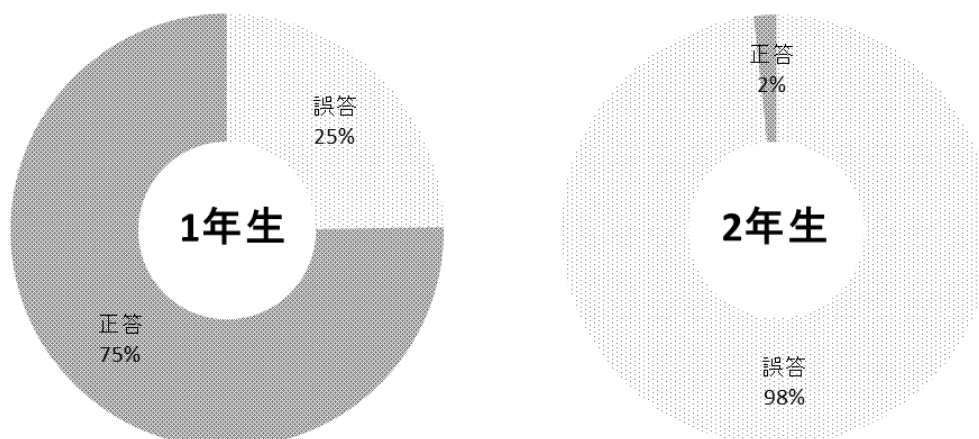


図 3-2 学年別「共同注意」の正答率

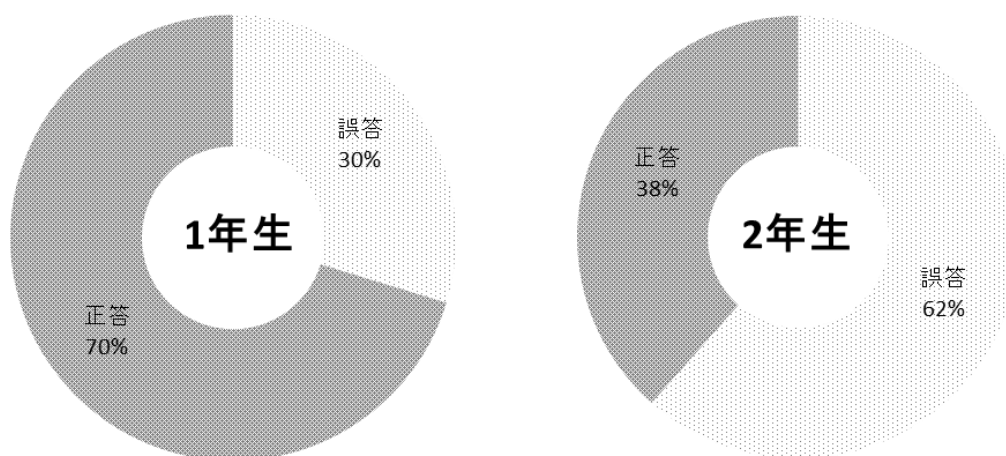


図 3-3 学年別「象徴機能」の正答率

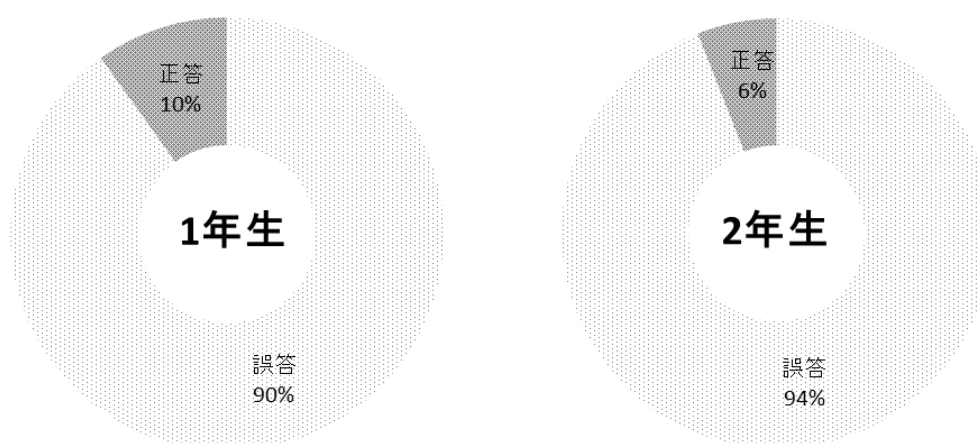


図 3-4 学年別「過拡張・拡張的用法」の正答率

(2) 学年別の比較

各問への正答について1年生と2年生の正答者の分布を比較するために、マン・ホイットニーのU検定を行った。この検定では、「2群の母集団の分布は等しい」という帰無仮説が設定されている。分析結果を表1に示す。

その結果、言葉の発達に関するタームを問う大問1では、早期出現語彙、クーイング以外の二語文、初語、喃語、語彙爆発で、2群間に有意差が見られ、両群で正答の分布に違いがあることが示された。すなわち、正答者の割合の分布から、二語文、喃語、語彙爆発では1年生の方が、初語では2年生の方が正答者の割合が高いことが示唆される。

さらに言葉の発達の発現順を並び替える問題では有意差は見られず1年生と2年

生の中で、全て正しく並び替えられた者の分布に違いは見られなかった。

言葉の発達に関わる他の領域の発達に関する問いでは、過拡張でのみ有意な効果が見られず、他の三項関係、共同注意、象徴機能では有意差が見られた。正答者の分布の割合を見てみると、いずれの項目も2年生より、1年生の方が正答率が高いことが示された。

表1 マン・ホイットニーのU検定の結果

項目	検定統計量 U	検定統計量 Z	有意確率
二語文	5066.00	-3.55	$p<.001$
早期出現語彙	5656.00	-2.10	.04
初語	4171.00	-4.35	$p<.001$
喃語	3682.00	-5.54	$p<.001$
語彙爆発	2031.00	-9.65	$p<.001$
クーイング	5653.00	-1.03	<i>n.s.</i>
発現順並び替え	5280.50	-1.88	<i>n.s.</i>
三項関係	2953.50	-7.35	$p<.01$
共同注意	1563.50	-11.27	$p<.01$
象徴機能	4027.50	-4.69	$p<.01$
過拡張・拡張的用法	5677.00	-1.07	<i>n.s.</i>

5. 考察

5.1 調査結果から示唆される本学の課題

上述の通り、本調査の対象者である2年生は1年半にわたって継続的に言語発達に関する学びをしてきた。しかし、2年生の正答率が低い項目が数多く見られ、発達に関するタームや知識が定着していない姿が見られた。2年生で正答率が高い項目である「2語文」「クーイング」「初語」はいずれも問題文の中に回答の手がかりが含まれていた。具体的には、2語文を問う問題では「2つの単語」、クーイングでは「クー、クー、と聞こえる音」、初語では「初めて意味のある言葉」というように、タームに含まれる言葉が問題の中で使われていた。したがって、ことばの発達に関する知識自体は記憶しており、思い出すための手がかりさえあれば想起できるという段階である可能性が示唆される。しかし、言語的な手がかりがなければ想起できないのであれば、こどもの姿を観察してその年齢における発達の特徴を思い出すこ

とは難しく、発達に関する知識を保育現場で活用できる段階には至っていないと言えるだろう。一方、語彙爆発・語彙の爆発的增加期については、問題中に手がかり(急激に語彙を覚える)があっても正答率が低かった。これは、同じ現象を保育の心理学と保育内容・言葉のそれぞれで異なるタームで教授していたため、学習者に混乱が生じ、知識の定着の妨げとなった可能性が考えられる。

また、繰り返し学んでいても、具体的なイメージを持つことが難しいタームについては知識が定着していない様子も見られた。「喃」は常用漢字外であり、日常的に使われる漢字ではない。さらに、喃語は乳児の様々な言語性を持った発音が含まれ、広範囲にわたる現象をさすタームであるといえる。このような特徴を持つため、繰り返し学んでいても喃語の正答率は低かったものと考えられる。同様に、過拡張・語彙の拡張的用法は、拡張ということば自体にもなじみがなく、さらにことばの意味を理解するためにはカテゴリー知覚や概念の階層構造に関する理解を前提としている。この前提を理解していなければ、単に拡張的用法を用いるこどもの姿(例えば、すべての動物をワンワンと呼ぶ)を説明されても、あることば(ワンワン)を別の概念(犬以外の動物)を説明する時にも拡張して用いているのだと理解することが難しい。そのため、そもそも理解できず、知識として覚えることができないものと考えられる。

さらに、1つの授業でしか扱っていないターム(早期出現語彙、三項関係、共同注意、象徴機能)はいずれも2年生の正答率が低く、1回の授業で扱っただけでは、ほとんどの学生にとって知識の定着には至らない可能性が示された。

発達の発現順の並び替えは1年生、2年生ともに正答率が低く、発達の見通しを持つことは非常に難しい様子が見られた。

5. 2 課題を解決するためのカリキュラムマネジメント

本学の現状として、複数の科目でこどもの発達について教授する機会があるものの、それぞれの連携が不十分であり、学習者に対しても科目間の相補的な関係性を明示的に説明できていないという課題がある。また、2年間という限られた期間の中で、どのような順番で学んでいくことが効率的であるのかについての議論も十分になされているとは言いがたい。野尻ら(2014)が指摘しているように、講義内容の時期を調整し、他科目との連携を図ることで、学生の学習状況に合わせた質の高いカリキュラムが作成できる。本学においても、このようなカリキュラムマネジメントをおこなうことが急務であるといえるだろう。

前節で論じた通り、本調査から、本学の学生の言語発達理解に関して、繰り返し学習しても手がかりがないと想起できない、日常的・具体的でない事柄に関する知

識の定着が難しい、発達の見通しを持つことができないといった課題があることが示された。カリキュラムマネジメントを行うことでこのような課題が解決できる可能性がある。例えば、科目間で共通して学ぶ事項を洗い出し講義内で使用するタームを統一すること、科目間の関連性を明示し、様々な視点からこどもの発達を繰り返し学んでいることを自覚させることで、繰り返し学ぶことによる知識の定着が促進されると期待できる。さらに、実習も含めた学習の順番についても協議することで、実習で観察したこどもの姿と学んだ発達に関する知識を結びつけ、発達段階に合わせた指導計画の立案できる力を育てることにつなげていきたい。したがって、保育の心理学Ⅰ・Ⅱと保育内容・言葉の3科目の連携にとどまらず、他の保育内容科目や実習指導との連携も視野に入れなければならない。

6. おわりに

近年、保育者養成校をとりまくさまざまな社会環境の変化により、従来の保育者養成教育を改善しようという動きが盛んであり、そのような取り組みの一環として、カリキュラムマネジメントが注目されている。本学においても教科間の学習の積み上げが不十分である、実習での学びと学校の教科学習をうまく関連付けることができていない、卒業後のキャリア形成に学校での学びが十分に直結していない等のさまざまな教育上の課題を抱えており、カリキュラムマネジメントの必要性について話し合いが始まりつつある。そこで、教科間の横断的な学習の効果に着目し、現状の把握と今後の方向性を見通しをたてるために、幼児の言語発達の教授という授業内容に共通性をもつ2つの科目、「保育内容・言葉」と「保育の心理学」で教授した知識の定着度に関する調査を行った。その結果、2年次の後期においても、継続して学習しているはずの幼児の発達について、十分修得できていないこととその学びが保育の実践にも活用できていないだろうことが示唆された。これを受けて、発達に関連する教科の全担当教員間での議論や連携、教科学習のみならず実習や卒業後の保育現場といった実践の場におけるこどもの発達への理解や知識の充実を目指した授業計画等、多角的な論点を含めたカリキュラムの再構築のとりくみが求められている。

引用文献

権藤眞織(2007)「保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連：学生自身による日誌の内容分析学習を通して」『近畿大学豊岡短期大学論集』,4,pp.39-47
田中崇教・柴田玲子・井上範子・池内裕二・出木浦孝・小西博子・中村多見・山本

幾代・山田純子・田中弓子(2013)「『カリキュラムの考え方と特色』改訂をテーマとした保育学科ファカルティ・ディベロップメント活動の実施報告：保育者養成カリキュラムの構造化と教育責任の明確化に向けた新たな試み」『高松大学 研究紀要』,58・59 合併号,pp.183-197

徳本達夫(2015)「保育内容総論授業の現状と課題」『人間福祉研究』,13,pp.83-92

野尻美枝・大橋伸次・西田咲希・東由実(2014)「保育者養成におけるカリキュラム・マネジメントⅠ カリキュラムマップをふまえたシラバス作成に向けて」『国際学院 埼玉

松尾由美(2016)「オレンジリボン運動への参加は児童虐待への理解を深めるか：「教育・保育相談支援」の受講生を対象として」『関東短期大学紀要』,58, pp.1-6.

村田恵子(2016)「保育士養成課程における施設実習指導の現状と課題：施設および養成校実習指導担当者への調査から」『就実教育実践研究』,9,2016,pp.69-77

横沢文恵・阿部弘生・奥山優佳・永盛善博(2016)「多角的・総合的視野をもった保育者の育成における一考察：＜子どもと遊び＞から教育実習へのつながり」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』,6,pp.123-137

渡部美佳・佐藤邦子・大澤力(2016)「保育者養成校で学ぶ領域横断型学習に向けた基礎調査：「昆虫」を用いた取り組み」『東京家政大学研究紀要』,56,pp.167-171